

# チュニジア留学体験記

＠宮津信之介（経済学部4年）

**留学先** → チュニジア、  
ブルギバスクール（語学学校）

**期間** → 2007年7月

**留学の種類** → チュニジア政府奨学生

**留学の動機** → 色々な国に行ってみたかったところにチュニジア奨学金の話が降ってきたから。



（水煙草を吸う宮津くん）

**費用** >> 寄費8,000円、生活費3.5万円、保険2.5万円、  
旅行3万円、航空券24万円  
**お金** ¥¥¥ **レート** >> 100円=105TD

## ある1週間のできごと

	月	火	水	木	金	土	日
午前				授業（スピーキング8:00-10:30、 ライティング10:45-13:00）			
午後				市内探索、ネット、カフェ、買い物など		チュニジア 旅行	
放課後			18:00-22:00 昼寝、ご飯 22:00-27:00 授業の予復習、おしゃべり				

## はじめに

チュニジア政府給費留学ではあるが、私の滞在はたったの一ヶ月である。よって、私の気分や理解度は、留学生より旅行者に近かつたかもしれない。いまチュニジア体験を語るときも、まだまだわからないことが圧倒的に多い。短期留学者としての印象を述べることをご了承願いたい。

## イスラムの国チュニジア

チュニジアでは、イスラム教が国教だ。国民の大半はスンニ派だというが、西欧よりの政治を行っている影響か、街の雰囲気はリベラルだ。道行く女性はTシャツを着ているし、ノースリーブの人すらいる。スーパーではお酒を売っているし、ビールを買う場所には事欠かない。何より、チュニジアピール、チュニジアワインという名産品もあるくらいだ。

そのせいか、チュニスに酒を楽しみに来るアルジェリア人やリビア人もいるようだ。彼らは車で簡単に国境を越えてくることができるらしい。仲良くなつたアルジェリア人からは、明日一緒にアルジェリアにこないか、とさえ言わされた。日本人のアルジェリア入国にはビザが必要だと断つたが、彼らはビザの意味がわからなかつたようで、ノープレロブレムを連発してなかなか引き下がらなかつた。

## 政治と治安

チュニジアでは、この二十年、大統領が変わっていない。どの飲食店に行っても、ベン・アリ大統領の写真が飾られている。暇さえあればしゃべっていたチュニジア人の若者たちも、街中では政治の話を話さなかつた。ただ、1987年のクーデタでブルギバ大統領を駆逐した後、今の体制が長続きしているのは、同政権が、社会主義やイスラム原理主義を抑え、いち早く西欧的な近代化を進めたおかげだろう。人々の生活も周辺のイスラム国より良く、政権交代の気配もないようだ。

政治の安定もあるのか、治安はすこぶる良い。とくに、観光客にとってはこのうえなく安全な国だろう。お金を落としていく外国人観光客は、大切に扱われていると感じる。実際、警察官も、かなりたくさん見かける。テロや暴力事件がないのもうなづける。

## 観光

観光業は、チュニジアにとって重要な外貨獲得手段だ。

しかし、遺跡の環境は、私が旅行したことがあるインドやイタリアに比べると、まだまだ整備されていない。たとえば、遺跡のほとんどは、触ることに制限がない。かの有名なカルタゴ遺跡に至っては、触れるどころかよじ登ることさえできる。崩れたらどうするつもりなのだろうか。遺跡の目立たないところには、キャンプファイヤーの跡や落書きもあった。

また、チュニジアの観光スポットは、無料で入れるところが多い。インドでは、有名な観光地の多くで入場料を徴収していて、とくに外国人特別料金は物価に対して驚くほど高かつた。チュニジアでは、入場料が請求されたとしても、現地の物価水準のまま良心的な料金設定だった。

これに対して、海辺のリゾート地では高額な料金を請求される。ビーチ付近のカフェなどは、日本と変わらないほど値が張っていた。やはり、ヨーロッパの観光客やイスラムの富豪たちがビーチにバカンスに来るためだろうか。

## 経済と物価

チュニジアは、考えていたよりも物価が高かった。そのため、普段の生活では、予想外の節約を心がけた。首都のチュニスでは、多くの市民がある程度豊かな水準で暮らしているように見えた。物価は毎年3%前後、上昇しているらしい。最近、チュニスで暮らし始めた学生の話でも、物価が上がり続けているのが実感できるという。

ある若いチュニジア人が自嘲して言うには、「この国は何も作っていない。自国の産業なんてないんだよ。唯一作っているといえるのは、オリーブとワインくらいじゃないかな。日本はすごいよね」ということであった。しかし、実際には農業だけでなく、燐鉱石や石油などの鉱業や服・革製品・機械製品などの製造業もさかんで、近年の経済成長率は5%を超えるようだ。

近くの食堂やレストランで食事すると、だいたい300円以上はかかった。他方、タクシーはとても安く、初乗りが30円強だった。市電の初乗りが30円であることを考えると、得な気分になる。おかげで私は毎朝、タクシーで相乗りして通学していた。

## 生活習慣

チュニジアでは、物事が大雑把だ。日本の感覚で考えると、さまざまなことが適当に見えてくるほどである。私の留学も、当初は2ヶ月の計画であったが、学校に到着してみると、授業料の免除条件で誤解が判明し、予定を変更して1ヶ月早く帰ることになってしまった。

レストランでも、メニューに乗っている料理でも、食材がないから作れないと言われることがよくあった。日本とはメニューの意味が違うのかもしれない。街中の安食堂はもちろん、一食1000円以上もするフランス料理店も例外でなかった。ある店では半分以上の料理が注文できないことがあった。とくに伝統料理のひとつである「タジン」は、ほとんどの店のメニューに載っているが、なかなか作ってもらえなかつた。結局、メニューに載っていない店で、ダメ元で頼んだら作ってもらえたのだが。

## サマータイム

チュニジアでは、4月から10月までサマータイムを適用している。1年の中でサマータイムの方が長いなら、一層のこと、冬をウィンタータイムと呼んではどうだろうか。ただ、チュニジアがサマータイム制をとっている理由は、日本とは異なるように思える。この国の日照時間は十分すぎるほどあり、私がいる間は朝5時から21時まで日が出ていた。そして昼間は暑くて仕事の能率も悪く、お客様も外出を控えるようだ。それゆえ、朝早く少しでも涼しい時間に活動するためにサマータイムが有効だ。サマータイムでも、日没は21時。カフェでは、21時以降がもっとも人で溢れる時間であり、郵便局や銀行などでは、「朝7時から12時まで」と「夕方18時から20時まで」というように、営業時間が分かれている。少しでも能率的に、そして楽しく生活するための知恵であろう。

## 時間感覚

日本人の感覚からすると、チュニジアでは時間を信用できない。ガイドブックには、空港から街までのバスが20分間隔で運行していると書いてあったが、私は50分も待たされた。しかし、それも後から考えてみれば当然のことと、そもそも時刻表が用をなさないようだ。ひょっとしたら時刻表は存在するのかもしれないが、観光局の人間に聞いても知らないと言われたので、おそらく誰もアテにしないのであろう。ちなみに、路線図は存在しているらしいが、観光局でも入手できなかつた。おかげでバスに乗るには、いちいち人に聞かないと乗れなかつた。

バスの間隔だけでなく、大抵のことに対する多少の時間のずれは許されるし、それに対して誰かがイラつくこともないようだ。よく言えば、この国は時間の流れが豊かであるといえる。昼間からいい大人が、カフェでシーシャと呼ばれる水タバコを吸ったり、トランプをしたり、話に花を咲かせたりと、時間に追われる様子がない。この人々は時間をのんびり使って幸せそうに暮らしている。日本よりずっと豊かな時間を持っているといえるだろう。

## 授業

授業は基本的に週五日、平日の8時～13時で45分授業が6時限分ある。前半の3時限がスピーキング、後半の3時限がライティングでそれぞれ別の先生が担当してくれた。私はアラビア語のアルファベットすら知らない状態だったので、当然の如く全くの初心者クラスに入った。

初日は20人くらいで授業をしていたのだが、私の通っていたブルガスクールはイスラム圏ではトップクラスの語学学校だったという。先生はアラビア語とボディーランゲージのみで授業を行なうのだが、それで意味もわかつたし、文法的な説明も理解できた。さらに、授業が面白い。やはりトップクラスの学校でだけあって、教師も優秀であった。ただ、その学校の先生もやはりチュニジア人らしい時間感覚を持っていた。ライティングのクラスでは、10時45分開始のはずの授業が11時になっても始まらないことも何度かあった。

## クラスメイト

私のクラスはアメリカ人、イタリア人、フランス人、ベルギー人、ノルウェー人、それと日本人で構成されていた。学生だけでなく、ジャーナリストや主婦も参加していて、年齢的にも16歳から28歳までなかなか幅広かった。他のクラスにも40歳を超える生徒もいたらしい。

このクラスで何より驚かされたのはクラスメイトの優秀さだ。トリリンガルなどは特に驚くべきことでもなく、私のクラスの16歳のアメリカ人などは、この年で既に5ヶ国語を話せて（うち3ヶ国語はペラペラ）アラビア語で6ヶ国語目だと言っていた。4ヶ国以上の言葉を話せる人間が半分以上で、2ヶ国語すら満足に話せない私はひどく不出来な生徒であった。

また、チュニジアがフランス語圏であるためか、日本人以外のクラスメイトは全員フランス語が話せた。先生もフランス語は自由に使えたので、何か困ったことがあるときはだいたいフランス語が飛び交うこととなつた。

## 寮

私の住んでいた寮は学校から徒歩で約40分弱。高級な住宅地の中にあり、寮にはフットサルコートとバレーボールコート、それと卓球台が備わっていた。最初は学校から遠かったことにすぐぶる不満だったが、サッカーと卓球を存分に楽しめたので最終的にはここで良かったと思えるようになっていた。寮主宰のスポーツ大会も毎週あり、おかげでいろいろな人たちと仲良くなれた。やはり、スポーツは国境を越える。

寮は二人一部屋で、なんと私のルームメイトは日本人だった。こんなことなら相部屋の相手は誰でも良いなんていわず、日本人以外にしてくれといつておけば良かったと多少後悔したが、文



## 『チュニジア留学体験記』 宮津 信之介

法書などを借りることも出来たので結果的には悪くなかった。

実はブルギバスクールにはこの奨学金制度を利用した日本人がたくさん来ていて、私を含めて13人もいた。

寮にはいろいろな人間がいて面白かった。最も驚かされたのは、28歳のルーマニア人である。ルーマニア語、英語はもちろん、ロシア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語などなんでも話せ、アラビア語もかなりのレベルであった。ルーマニアの外務省で働いていると言っていたが、他の友達はアメリカのペントAGONで働いていると聞いており、話せる言語の多さも考慮すると、実は裏の世界の人間ではないかと現在も疑っている。

## 言葉

チュニジア人はバイリンガルの人間が多い。大部分の人がアラビア語とフランス語をしゃべれる。最近は英語も学校教育に組み込まれ始めたので、若い人の中には3ヶ国語を話せる人も多い。もちろん、日本人相手にはとりあえず「コンニチワ」と言ってくるが、英語を話せない多くの人間は当然のごとくその後はフランス語を続けてくる。当然といえば当然の反応なのかもしれないが、私がアラビア語で話しかけ、アラビア語で相槌を打ってもフランス語で話し続けたりもする。フランス語はわからないから簡単なアラビア語してくれといつても、ちょっとしたはずみでフランス語に切り替わってしまう。いかにチュニジアにフランス語が浸透しているか、また他の東洋人、外国人がいかにチュニジアでフランス語を使って話しているかを感じさせられた。

また若い人間以外は、仕事で使っていなければだいぶ分の人間が英語をしゃべれない。ブルギバスクールの先生でさえもそれは例外ではなく、英語をまともにしゃべれる先生がたったひとりだったので、何かあるときは毎回その先生を探さなければならなかつた。

## 食べ物

私が食べた多くのチュニジア料理はだいたい薄味であった。あまりグルメとはいえない私の舌では、その薄味を敏感に感じ取ることは出来なかつた。要するに、あまり美味しいとは感じなかつたということだ。

その中で、私が気に入ったのはアジャと呼ばれるトマト煮だった。私がチュニジアで気に入った食べ物はほぼすべてトマトが入っている。イタリアが近いせいだろうか、トマト料理はどれを食べてもとても美味しかつた。その中でも、このアジャという料理が特に美味しく、友人の中には毎日一回は食つているというものもいた。もっとも、グルメなイタリア人に言わせると、チュニジア料理はあまり美味しいくない、やはりイタリア料理が最高だ、と言っていたが・・・。

チュニジアで食べることの出来る料理の中でも、スパゲッティは特にオススメできない。これまたイタリアが近いせいか、チュニジアでもスパゲッティはかなりメジャー食べ物である。しかし、彼らのスパゲッティにはアルデンテという概念がおそらくないのではないだろうか。毎回ノビノビのスパゲッティを食べるはめになるのである。そこそこ高級な店でもそうだったので、もしかするとチュニジア人にとってはそのほうが美味しいのかもしれない。

スパゲッティもアジャも値段はだいたい同じで、食堂で300円、レストランで500円くらいだ。他の食べ物も似たり寄ったりの値段である。ただ、チュニジアはフランスの影響のせいかパンはとても安く、食堂でもレストランでもフランスパンが無料で、かつおわり自由であった。

ちなみに、チュニジアの食べ物は辛いものが多い。やはり暑いからであろう。街中では香辛料が量り売りされており、見ていて面白かつた。

## カフェ

チュニジアを語る上で、カフェを忘れてはいけない。チュニジアのカフェは、日本で言う居酒屋のようなもので、大抵の店ではおじさんや若い男が集まっている。カップルで行くようなカフェもあるがやはり少数派で、女の子同士でカフェにいる姿はさらに少ない。このあたりはイスラム教が影響しているようである。

カフェは街のあちこちにある。当然、学校のとなりにもカフェがあり、20分間ある昼休みはいつも大盛況だった。私も当然の如く

毎日通っており、朝にコーヒーを一杯、昼休みは暑いミントティーかシトロネードと呼ばれるレモンジュースを飲んでいた。コーヒーもミントティーも、砂糖をたっぷりいれて甘くして飲むのがチュニジア流である。

また、多くの店にはシーシャと呼ばれる水タバコが置いてある。200~500円くらいで借りることができ、一度借りると何時間も吸っていることができた。どこも店でもたいていはりんごの香りのする水タバコが出てきて、店内になんとも言えぬ甘い香りが漂っている。

また、異国人が店でシーシャを吸っているのが珍しいのか、一人でシーシャを吸っているとよく話しかけられた。当然、そんなところにいる親父達はたいてい英語が話せないので、覚えたてのアラビア語を使うことを楽しめた。



## 地中海

チュニジアは地中海に面している。首都チュニスから電車で20分も行けば、晴天のもと、憧れの地中海でおよぐことができる。チュニジアにはいくつものリゾートビーチがある。そこではバカンスを楽しむヨーロッパの人々や近隣諸国から週末を楽しみに来たアラビア人、地元のチュニジア人たちがそれぞれに海を楽しんでいる。

私が行ったビーチのひとつに、エルハワーリアというビーチがある。そこはリゾート地から少し外れた場所にあり、見たこともないようなきれいな海が広がっている。ビーチでは地元のチュニジア人ばかりが家族で海を楽しんでおり、リゾート地の海よりもはるかに澄んだ海を堪能できる。唯一難点をあげるなら、周りにお店が何もないということだ。地元の人々はお弁当持参で来る。チュニジアで3~4時間も海を楽しめば、次の日は日焼けで泣きそうになることうけあいだ。

## アルバイト

ある日、学校を出ると白人の男性に声をかけられる。ひげはぼうぼうで帽子をかぶっており、見るからに怪しい。一応話を聞いてみると、映画撮影のエキストラを募集しているらしかった。説明では役柄は日本人のビジネスマン。限りなく怪しかったが、日給5000円につられ、これも良い経験だと思い話に乗ってみる。

次の日、集合場所に行ってみるとどうやらだまされていたわけではないことがわかる。ここはチュニジアだというのに、スタッフはみんな英語で話している。そこにはエキストラとしていろんな国の人人が呼ばれていた。聞いてみると、どこの国の人もみな日給5000円で雇われていた。チュニジアで日給5000円ならずいぶんわりの良い仕事だと思っていると、なんとナイジェリア人

『チュニジア留学体験記』 宮津 信之介

の学生は拘束 12 時間で 5000 円は割に合わないと文句を言っていた。朝日晚、すべての食事がついていたというのに、だ。アフリカの生活水準も意外に高いのかもしれないと思わされた。

いざ撮影となると、お前は若く見えすぎるから使えないと言われる。そして、なんと実際の役柄はインドネシアの高官。最初の説明とまるつきり違う。そもそも、それならなぜ日本人を探していたのかわからない。おかげさまで一日中待機させられることになった。それでも給料は変わらなかつたが、のけ者にされた感じがしてかなりさびしかった。

ちなみに、映画の撮影現場に、以前にアカデミー賞をとったことのある監督が応援に駆けつけていて驚かされた。

## サウスチュニジア

長期連休を利用して、2 泊 3 日で南の方に旅行に行ってきた。アルジェリア国境付近の山々、塩湖、スターウォーズのロケ地など色々な観光地をまわってきたが、一番感動したのはなんといっても砂漠だ。真夏の灼熱の暑さの中、らくだに乗って砂漠を歩いたり、オアシスに飛び込んでみたりと、アフリカらしさを満喫してきた。最も素晴らしい思い出は、夜中に満天の星空を見上げたことだろう。見渡す限り月以外の明かりは何もなく、背中で砂のひんやりとした心地よさを楽しみながら見上げた星空は、生涯忘れる事はないだろう。

## さいごに

たった一ヶ月の留学であったが、最高に楽しい一ヶ月であった。毎日遊び倒していたような気もするが、生まれて初めて毎日の授業の予復習をするなど、勉強もかなりしていた気がする。とても充実した毎日だった。

非日常の生活をすると普段は見えないいろいろなことが見えてくる。

まず、自分。気力さえ充実していれば、毎日 3 ~ 5 時間の睡眠時間で生活できるということに驚かされた。いかに日本で無気力な生活を送っていたかがよくわかる。また、自分が毎日勉強できていることにも驚かされた。やはり自分は環境に大きく影響を受けるらしい。

次、コミュニケーション。世界共通の言葉はボディーランゲージであるということを思い知らされた。言葉なんかできなくとも、時間をかけて気持ちは伝わる。チュニジアに行ったことで、ちょっととは表情が豊かになったのではないかと思っている。

食事。日本のごはんは美味しい。インドへ行ったときも痛感したが、やはり日本のごはんは美味しい。毎日こんなごはんが食べることができる幸せに気づかされる。

こんな具合にいろんなことが見えてくる。今回の留学のおかげで、自分の幸せの中で予想以上に食事の占める割合が多いであろうことに気づかされてしまった。おそらくごはんがおいしくないとよく言われるアメリカやイギリスでは、私は住むことはできないであろう。

非日常の生活というのは大変楽しいものだ。何かしら自分の考えに変化、もしくは発見を与えてくれる。これを読んだひとりでも多くの人が、非日常の世界に興味を持つてくれる事を願っている。



## ■□■留学アンケート■□■

①その国に持って行って良かったものは何ですか？

帽子くらい？日差しが強かったので。

②その国に持って行かなくて後悔したものは何ですか？

携帯音楽プレーヤー、デジカメ、日アラ辞書、タオルなど多数。ほとんど何も持っていくなかつたので。

③服装はどうしてましたか？現地で服を買いましたか？

現地でスクール（バザーみたいなもの）で買った服を着てた。服もほとんど持つてなかったので。

④インターネット、音楽、書籍、テレビなど情報環境はどうでしたか？

ネットが使えるお店はたくさんあり、日本語入力もできる。が、寮ではネットが使えないでの、USBメモリを持ってこないとノートパソコンとのデータの移動ができないので痛い目を見る。テレビは公共スペースに一応あったがほとんど見なかつた。テレビ、本ともにフランス語かアラビア語でさっぱり。音楽はアラビア音楽もあるがヨツロッパの音楽も普通にある。

⑤留学生の国籍構成はどうなっていましたか？

正確な構成はわからない。が、やはりヨーロッパ人が多かつた。中でも、フランス人、イタリア人、スペイン人多く同数くらいで、彼らを合計すると全体の7割以上を占めるはず。約200人中日本人は13人。アジア人は少なく、知ってる中では韓国人が一人いるだけ。